

育児期母親の働き方と夫婦間相互調整
——宇都宮市及び周辺地域におけるプレ調査——

Work Style of Mothers in Child-Rearing Years and Mutual Adjustment
between Husband and Wife:
Pre-Survey in Utsunomiya City and Surrounding Areas

菊地 敦子¹・石井 大一朗²

KIKUCHI Atsuko, ISHII Daiichiro

¹宇都宮大学地域創生科学研究科修士課程

²宇都宮大学地域創生科学研究科准教授

育児期母親の働き方と夫婦間相互調整 —宇都宮市及び周辺地域におけるプレ調査—

Work Style of Mothers in Child-Rearing Years and Mutual Adjustment
between Husband and Wife:
Pre-Survey in Utsunomiya City and Surrounding Areas

菊地 敦子¹・石井 大一郎²

KIKUCHI Atsuko, ISHII Daiichiro

本稿は、育児期母親の主体的な働き方としての起業の可能性を探るための分析視点を得ることを目的としている。本調査は、異なる起業スタイルの育児期母親3人を対象として、現在の働き方をどのように実現しているのか、また育児期母親の起業を支える家庭環境、なかでも夫婦間調整に着目して現状を詳しく把握する。調査分析は、事前のwebアンケート結果をもとに、半構造化インタビューを各60分程度実施し、得られたデータをM-GTA (Modified Grounded Theory Approach) により質的に分析した。その結果、現在の働き方が生み出された背景には、「自らの居心地の良さの獲得」、「育児家事と仕事とのバランスを生み出すために妻から夫に働きかける契約的調整」、「夫婦間相互調整を支える外部からのサポータティブな環境」があることが明らかとなった。また、仕事以外に複数のコミュニティに所属していることも示された。

キーワード：育児期母親、起業、夫婦間調整、M-GTA、宇都宮

I. はじめに

総務省統計局の労働力調査によると、労働人口は2000年(平成12年)をピークに減少を続けている。こうしたなか2015年9月に「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」が公布された。本法は、女性が職場で活躍することを求めるものである。また、濱口(2015)は、育児期母親のこうした活躍を支える女性関係の法律を見る限り、欧米諸国と遜色はないと述べている。女性の就労や職場での活躍が期待される一方で、社会生活基本調査の時系列データ¹からもわかるように家庭での家事育児の女性の負担はほとんど変わっておらず、女性が活躍しやすい環境が生まれているとは言い難い。家事育児の負担が膨大となる幼少の子をもつ育児期の女性にとっては、なおさらである。育児休業の取得率は、女性は83.0%、男性は7.48%であり、2030年までに男性の取得率目標は13%という(厚生労働省 令和元年度雇用均等基本調査、男女共同参画局)。また、小坂・柏木(2017)は、育児期母親の就労継続・退職を規定する要因は、「家庭優先」「やりがいのある仕事」

¹ 宇都宮大学地域創生科学研究科修士課程 kikuatsu7@gmail.com

² 宇都宮大学地域創生科学研究科准教授 ish@utsunomiya-u.cc.ac.jp

「自立志向」「夫や夫の親からの就労反対」「夫の家事育児サポート」「自分の親や周囲からの育児サポート」の6要因があることを示している。

こうしたなか、近年注目されているのが、妊娠・出産を経て得られる新しいネットワークや知識などをもとにした育児期母親の起業である。小坂らが示す「家庭優先」「やりがいのある仕事」「自立志向」についても満たしやすいと考えられる。依藤（2018）によると、起業することは、自らの役割を通して他者との非対称な関係性を形成する中で、「他者と他者としての自分」を見出すこと、そしてそれが自分の気持ちを尊重することとなり、母の役割を通して家族にも良い影響を与えることを述べている。

以上のような就労における女性の置かれている状況を踏まえ、本稿は、女性が家事育児を行い、働き生きる実現の方法として起業がどのような意味をもつのかを確認しつつ、起業を支える内的要因の育児家事分担や夫婦間相互の調整方法を明らかにする。これにより、将来的には女性にとって妊娠・出産・子育てが、自分の可能性を広げるライフイベントだと捉えることができる社会の実現に向けて、育児期女性の活躍促進や起業支援に資する施策づくりの示唆を与えることができる。

本研究では「起業」を幅広く捉え、自らが主宰して行うイベントや活動から経営、複数の会社に所属するような働き方を対象とする。これにより、女性の多様な働き方を理解すると共に、その実現を支持する要素が何かを幅広く把握することができる。

II. 調査の内容

宇都宮市および隣接する市町に在住する、子育て中の母親を対象として、どのような起業形態や働き方をしているか、そして起業を支える重要な要素である家事育児分担の現状、配偶者との関係調整はどのように行なっているのか、異なる起業形態をとる3人を対象として把握する。

1. 調査概要

調査概要は表1の通りである。なお、本調査研究は宇都宮大学のヒトを対象とした研究に関する倫理審査の承認を得て実施している。

表1 調査概要

調査対象者	宇都宮市および隣接する市町に在住する（起業準備開始時）で、未子の年齢が6歳以下の乳幼児を育児している母親3名
調査日時と調査場所	Webによる事前の調査票調査 2020年9月16日～9月26日 インタビュー調査 2020年9月17～27日 調査場所は、Aさん：オンライン会議室、Bさん：コミュニティハウス「上三川のいえ」、Cさん：無農薬野菜専門の直売所まんまとちぎレンタルスペース
調査方法	3名に対する調査票による事前Webアンケートを行い、その回答内容を元に、1名ずつ半構造化インタビューを約60分実施した。半構造化インタビューによって得られた音声は書き起こしをして、データの分析には質的研究の手法であるM-GTA（Modified Grounded Theory Approach）を採用した。

2. 調査内容

調査は、事前のWebによる調査票調査と、その結果をもとにしたインタビュー調査である。事前の調査では、属性のほか、起業の状況を把握するための事項として、職種、収入、起業時期、起業の目的、起業を選んだ動機、初期費用、初期費用に占める自己資金割合、仕事の受注経路、現在の月商などを聞いた。また起業を支える環境を把握するための外的要因として家族・仕事以外のコミュニティへの関わり、ソーシャルキャピタル²、その他、起業後の事業課題や始めてよかったこと関係する項目を聞いた。さらに、現状の自らの働き方をどのように認識しているのかを確認する事項を、主観的幸福度³、生活満足度⁴、育児自己効力感⁵、夫婦間に関しては、夫婦関係満足度⁶、夫からの育児サポートと夫婦関係⁷の尺度を用いて聞いた。

これらの事前調査の結果を踏まえ、特に起業とそれを支える環境に焦点を当てた設問項目について構造化によるインタビュー調査を行った。分析は、M-GTA（修正版グラウンディッド・セオリー・アプローチ）（以下、M-GTA）の分析手法を用いた。M-GTAは、データを切片化せず、データからキーワードを抽出しそれをもとに分析ワークシートにより概念化し分析するものである。これにより語り手のストーリーの展開全体やまとまりをもったエピソードを直接分析し、概念化できることに特徴もっている。

Ⅲ. 調査結果と分析

育児期母親 3 名に対するインタビュー調査結果は以下の通りである。M-GTA の分析手順にもとづき、分析ワークシートを作成し、生成された概念を相関関係に着目し、関連図にまとめて可視化する。

なお、関連図の作成には、小笠原 (2009) の性別役割分業意識の多元性を用いた (図 1)。小笠原によると性別役割分業意識は、男性と女性、伝統的役割と非伝統的役割の 2 つの軸で、男性と女性の伝統的役割の委譲に関する意識、男性の非伝統的役割の獲得に関する意識に 4 分類できるという。



1. 調査結果

結果図は以下の通りである。〈 〉 概念、【 】 サブカテゴリー、《 》 カテゴリーで表記した。A さん、B さん、C さんについて、生成した概念、カテゴリー、サブカテゴリーは以下の通りである。

A さん：

分析の結果 10 個の概念と 2 つのカテゴリー、4 つのサブカテゴリーが生成された。起業概要と概念に関しては (表 2) に示した。カテゴリー間の関係は結果図 (図 2) に表現した。

B さん：

分析の結果 8 個の概念と 2 つのカテゴリー、5 つのサブカテゴリーが生成された。起業概要と概念に関しては (表 3) に示した。カテゴリー間の関係は結果図 (図 3) に表現した。

C さん：

分析の結果 7 個の概念と 2 つのカテゴリー、2 つのサブカテゴリーが生成された。起業概要と概念に関しては (表 4) に示した。カテゴリー間の関係は結果図に (図 4) に表現した。

分析ワークシート Aさん

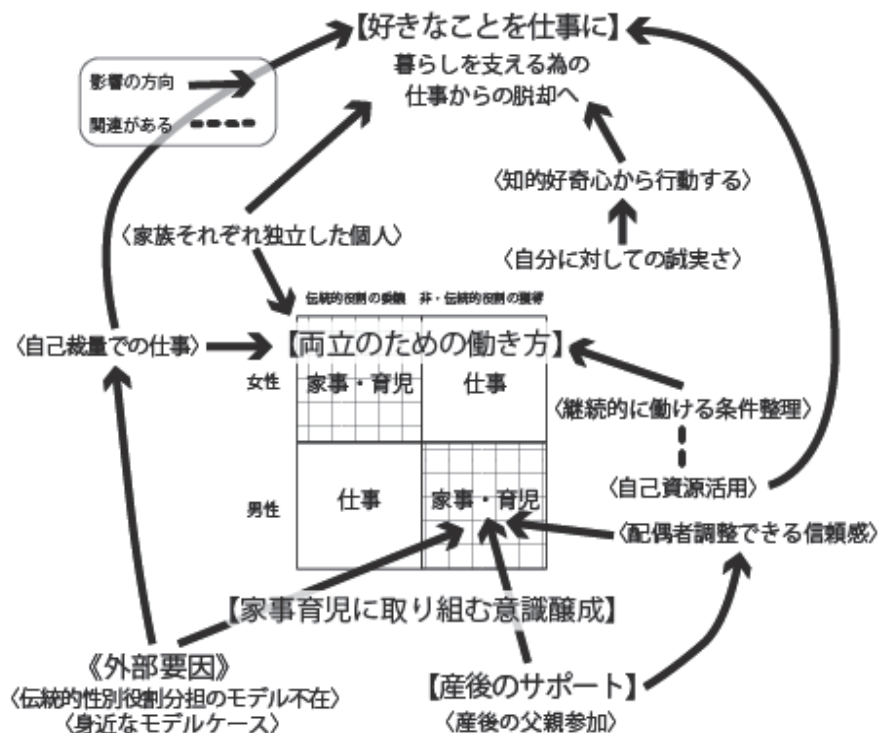
(表2)

愛知県出身 2歳5歳女児の母 夫 正規社員

起業・多様な働き方の内容	オンライン秘書、国際物流配送管理、オンライン研修講師、ライター
主体的な働き方を支える環境	100%オンラインでの仕事、配偶者との納得感ある家事分担
所属するコミュニティ	保育所・幼稚園などの保護者会役員、お米作り、大豆作り、味噌作り、自治会、

番号	概念名	定義
1	自分に対する誠実さ	安定も大切にしつつ、自分の本当の気持ちに向き合い、やりたいことを実現する行動をとること
2	知的好奇心から行動する	未体験だが、興味のある世界に飛び込み働くこと
3	継続できる働き方の条件整理	家事育児と両立し無理なく継続できる働き方の条件を探す行動のこと
4	自己裁量での仕事	家事育児と両立できて、働く時間と場所を自分で決められる仕事のこと
5	身近なモデルケース	会社の元同僚の起業や親族の会社経営など、プライベートと仕事を切り離さない働き方への憧れのこと
6	伝統的性別役割分担のモデル不在	伝統的性別役割を担う父親がいなかったこと
7	夫婦間調整	家事育児分担の見える化と苦しいことの受容から、協働体制や信頼関係を構築をすること
8	家族それぞれ独立した個人	家族はそれぞれ独立した個人の集まり、お互いを尊重して依存関係にはならないこと
9	自己資源活用	自分の作り出したものや技術を元手に、経済の循環を作り出すこと
10	産後の父親参加	産後の育児に父親が積極的に関わること

《仕事・家事・育児を両立させて、自由に生きる》(図2)



分析ワークシート Bさん

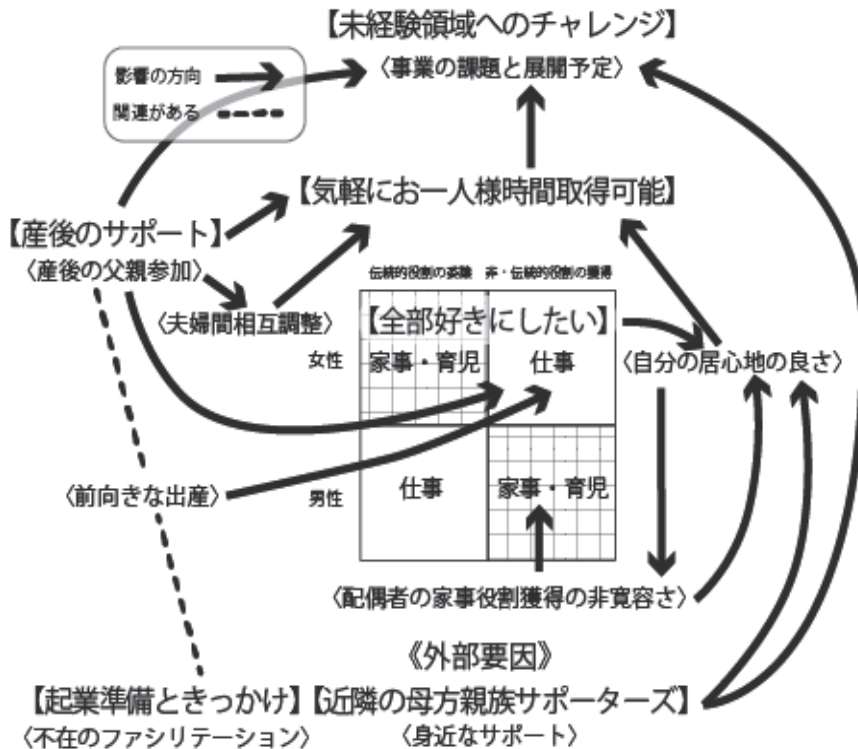
(表 3)

栃木県出身 7歳女兒 4歳男児の母 夫 正規社員

起業・多様な働き方の内容	女性専門の整体サロン 運動教室
主体的な働き方を支える環境	近隣にいる自分の親族コミュニティ、父親の育児参加（週末限定）
所属するコミュニティ	育成会 自治会 小学校図書ボランティア オンラインサロン3件 コミュニティ食堂 宇都宮市近隣起業ママ

番号	概念名	定義
1	配偶者の家事役割獲得の非寛容さ	配偶者との住居の清潔感レベルとのギャップに苛立っていること
2	身近なサポート	近隣に住んでいる母親の親族が存在し、気軽に子どもを預けられる関係性があること
3	前向きな出産	妊娠・出産時の困りごとを、自分の事業内容に結びつける積極的な考え方のこと
4	事業の課題と展開予定	現在の事業に必要なが、前職で未経験のスキルを獲得し、課題解決をしようとする事
5	自分の居心地の良さ	家事・育児・仕事を全部自分で行いつつ、自分のペースや空間を重視すること
6	産後の父親参加	父親が産後の子育てに積極的にに関わり、母親の負担が軽くなること
7	夫婦間相互調整	夫婦でうまくいかなかった時の関係修復方法が存在すること
8	不在のファシリテーション	自分が休職しても職場がまわる安心感と後輩の育成すること

《家事も育児も仕事も自分で好きに決めたい》 (図 3)



分析ワークシート Cさん

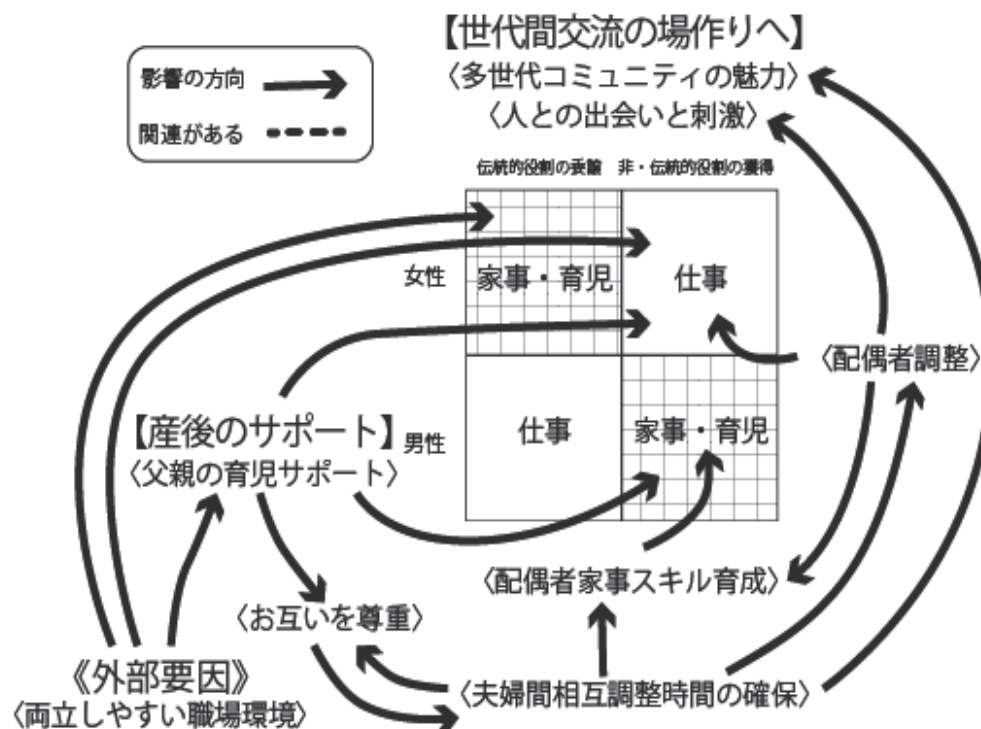
(表 4)

千葉県出身 6歳、2歳男児の母 本人と夫 正規社員 同じ会社で同期

起業・多様な働き方の内容	ママサークル主催 各種勉強会、体験会の企画運営
主体的な働き方を支える環境	家事・育児と仕事を両立しやすい職場環境、夫婦相互調整をする時間
所属するコミュニティ	子育てサークル、地域(市)の母親コミュニティ、地域(県)の働く母のコミュニティ、会社の同期繋がりママ友コミュニティ、自治会

番号	概念名	定義
1	父親の育児サポート	子育ての苦勞を一緒に味わうための共通体験としての出産と、家事育児分担表を活用しての役割分業のこと
2	夫婦間相互調整時間の確保	伝えたいことがある時に、意図的に夫婦で話す時間を作ること
3	お互いを尊重	活動への共感ではなく、理解を求めるコミュニケーションと受容と配慮をすること
4	両立しやすい職場環境	家事育児と仕事を両立しやすい職場環境と雰囲気のこと
5	人との出会いと刺激	多様な価値観の人との出会いと刺激を活動を通して触れること
6	配偶者家事スキル育成	配偶者が家事スキル向上して欲しい具体的内容のこと
7	多世代コミュニティの魅力	自分の親世代や下の世代が自然に集まる場所の魅力のこと

《夫婦の時間を大切に、出会いの刺激を求めたい》(図 4)



2. 分析とまとめ

ここでは3人について、特に現在の起業や働き方を獲得した背景や現在の状況、次に起業や働き方を支える家事育児に対する考え方や分担の方法、そして夫婦間での葛藤や合意を得る際に必要となる夫婦間相互調整に着目して把握する。

・Aさん

現在の働き方にした理由は、自らが時間や仕事の量を調整可能にして、家事・育児と仕事の両立を納得できる状態にしたいという意識が強くあった。自宅で仕事をするというワークスタイルを重視している。自らの仕事の拡大や自己実現を追求し過ぎることなく、全体のバランスや安定を大切にするなど無理しすぎない自分に寄り添う選択をしている。また、家事育児分担については、自ら家事育児の行動リストを作り（家事・育児の見える化）、夫婦の担当割合を整理し配偶者と交渉していた。夫婦間相互調整については、何かあった際には伝えることを大切にし、そうした機会を積極的に持つようにしていた。そこでは、お互いにアドバイスするわけではなく、話すだけ話し、自分で考えるという方法であった。夫婦はそれぞれ独立した存在という考えを強くもち、相手を尊重する関係を築いていた。

・Bさん

現在の働き方については、子ども2人を育てながらフルタイムで働き、ほぼすべてを担当している家事育児を行うのは無理だという考えで起業した。家事育児については、夫との話し合いの機会を設けたが、夫は帰宅が遅く出張もあること、清潔感のレベルに夫婦間でギャップがあり夫に合わせられないことから自らが担っている。またこうしたことから夫の家事スキル育成に関しては乗り気ではない。他方、自宅近隣に自らの実家や母親親族が住んでいるので、週末お互いの子どもを気軽に預けやすい環境にある。起業に関しては、収入の面から夫に反対されているが、自分の意志を尊重し活動している。家庭の生活費に関しては、夫からの収入を基盤としている。年収や手取りの金額はお互いに把握してない。夫婦間相互調整に関しては、夫婦でコミュニケーションをとることのできる夜の時間を大切にしているという。

・Cさん

現在の働き方は、出産経験をもとに地域に必要な活動を生み出したい、同世代に地域へ愛着が湧くような活動や場作りを実現したいということが大きな理由であった。家事育児分担については、働く時間が可変という環境を生かして、家事育児の時間と役割を配偶者と話し合い、柔軟に分担していた。例えば、平日の家事分担はこのようである。Cさんが朝ごはんを作る担当であり、夫は子どもを起こし、身支度や食事の世話をする。その後保育園まで送る。Cさんは、お迎えから夕ご飯、お風呂、そして寝かしつけまでを担当する。夫は帰宅後は、風呂掃除と洗濯をする。このような分担は家事育児を項目立てし、分担表を作成し、どちらがいつ何を行うのかを納得できるよう整理し

た成果と言える。夫婦間相互調整については、意図的に会話をする機会を設けることを重視していた。例えば、馴染みの居酒屋に行き、店員さんに子どもの相手をしてもらうことで2人の会話の時間を生み出したり、子どもの就寝後に、時間をとるなどである。コロナ禍において、夫婦ともに在宅勤務となり、以前よりも会話をする時間が増えたことをポジティブに捉えていた。他方、本人が力を入れているママサークルの活動に関しては、夫は理解を示してくれているが共感はしていないとのことであった。

3人のそれぞれの状況については、上述した通りであるが複数の人に共通する点もわかった。それは、自身の仕事や活動での利益は家庭の生活費には含まれない。つまり、経済の基盤は夫の収入であることであった。また、出産やその後の暮らしに共通する点がある。それは核家族であり、非・里帰り出産である点、そして産後の育児において夫が積極的に関わっていることであった。

家事育児分担については、女性にとって極めて大変な状況にあり自分1人では生活を維持できない産後の状況を、夫婦で共有し乗り越えていくための機会にしていたことが共通していた。これは分担割合が重要というよりは、夫婦間で問題を共有し、対話、合意されるプロセスを作り出すことの重要性を示すものと考えられる。主従関係ではなく対等な関係に基づく調整、つまり性別役割分業といった慣習とは異なり、合理的な判断が求められる契約的調整が図られていたということである。さらに、夫婦間相互調整については、3人ともに1つ以上の調整法をもっていること、なかでも夫婦2人の時間を作り出す工夫を、近親者や友人など家庭外からのサポータティブな環境を獲得しながら実現していることが特徴であった。

これら以外には、母親が自身の趣向と一致する複数のコミュニティに関わっていること、また起業する本人のもつ内面的な特徴として、社会的望ましさや周囲の評価よりも自分の気持ちに寄り添う行動を選らんでいることがわかった。家事育児に関しては、それぞれ工夫して納得いく形で配分をしていた。

IV. おわりに

本研究の結果から、育児期母親の働き方に影響があるのは、夫婦間相互調整ができる配偶者との関係性、母親自身の学びや活動の時間を取り易さが関係していることがわかった。堀口(2006)は、夫婦間相互調整の方法を持っているとは、夫婦関係にある程度満足しており、それは養育態度にも影響があるとことを指摘しているが、この点においては、本調査でも肯定された。また、家事育児の役割分担に関しては、渡辺(2019)が女性から男性に家事育児を協働することの必要性について、思いや考えを表出することが仕事との両立の実現を左右することを指摘しているが、今回の3人(Bさんは分担はしていないが表出している)ともにこれを実現していた。今回の調査結果からは新し

い視点も導出された。育児家事分担における性別分業や慣習にもとづかない「契約的調整」や夫婦間相互調整における「外部からのサポーター的な環境づくり」が女性の起業や働き方において重要であるということである。

今回は、3人のみに行ったものであるので十分な調査とは言えない。今後は夫婦の認識の一致性や、男性が家事育児に非協力的だが、起業している女性なども視野に入れた調査が必要である。また、契約的調整の実現に向けて男性が非・伝統的性別役割を獲得したくなる働きかけや、女性が男性の家事育児スキルとのギャップを許容するとともに、男性が家事育児スキルの取得意欲向上を促す方法を示していく必要がある。さらに、今回の調査では職場以外に自分の趣向にあうコミュニティに複数関わっていることは把握できたが、十分な聞き取りをすることができなかつたため、起業・働き方を支える外部要因として、そうしたコミュニティとの関わりによる日常的な多様な価値感に触れる機会や、学びの機会との関係について調査していく。

謝辞

お忙しいなか貴重なお時間を割いていただき、調査にご協力いただきましたAさん、Bさん、Cさんこの場を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

- [1] 濱口桂一郎『働く女性の運命』文春新書、2015
- [2] 総務省統計局社会生活基本調査 時系列統計表、2016
- [3] 厚生労働省 男女共同参画局 令和元年度雇用均等基本調査
- [4] 小坂千秋 柏木恵子「育児期女性の就労継続・退職を規定する要因」発達心理学研究 第18巻 第1号 pp.45-54 (2007)
- [5] 依藤光代 松村暢彦「起業を通じた子育て期の母親の成熟プロセスに関する研究」実践政策学 第4巻1号 pp.71-88 (2018)
- [6] 小笠原祐子「性別役割分業意識の多元性と父親による仕事と育児の調整」、季刊家計経済研究、No.81 pp.34-42 (2009)
- [7] 堀口美智子「乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度」家族社会学研究 17 pp.68-78 (2006)
- [8] 渡辺, 瑞紀; 板倉, 憲政「母親が行う父親の育児関与への調査行動がワーク・ファミリー・コンフリクトに及ぼす影響に関する質的研究」vol.67 no.2 pp.121-129 (2019)
- [9] 島井哲志 他「日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討」 pp.845-853 (2004)
- [10] 金子紀子 石垣和子 阿川啓子「おさがり文化と子育て中の母親のソーシャルキャピタルとの

関連」 pp.23-33 (2018)

- [11] 吉村隆 北山秋雄「中山間地域のソーシャル・キャピタルの検討」 pp.548-561 (2018)
- [12] 吉武尚美「中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベント」教育心理学研究, 2010, 58, pp.140-150 (2010)
- [13] 田坂一子「育児自己効力感 (parenting self-efficacy) 尺度の作成」甲南女子大学大学院論集創刊号 pp.1-10 (2003)
- [14] 笠井 真紀 河原加代子 「育児期間中の母親への夫の育児サポートと夫婦関係との関連」日本地域看護学会誌 Vol.9, No.2 pp.75-80 (2007)

注

-
- ¹ 社会生活基本調査では、生活の何にどのくらい時間を費やしているのかについて夫と妻が 1 日どれくらい時間を使っているのかがわかる。最新の 2016 年のデータによると、共働き核家族世帯だと、家事に費やす時間は、夫は 8 分、妻は 222 分、育児は夫 17 分。妻 76 分である。合計すると、家事育児に使う時間は、夫は 25 分、妻は 298 分その差は 10 倍以上である。
- ² ソーシャルキャピタルに関しては、金子 (2018) [10]金子と、吉村 (2018) をもとに、認知的な項目と構造的な項目を合わせて全 39 項目を聞いた。主なものは以下の通りである。認知的ソーシャルキャピタルに関する項目：自分の地域が好きか、地域の雰囲気や土地柄を気に入っているか、地域を大切に思うか、これからもこの地域に住み続けたいか、この地域での生活に満足しているか、ほか。構造的ソーシャルキャピタル：子どもを通じての地域のサークルや組織の所属、母親自身のためのスポーツ・趣味・文化等のサークルや組織の所属、地縁的な活動の参加、ほか。
- ³ 主観的幸福度は、島井 (2004) [9]より 4 項目を 7 件法で尋ねた。項目は次のとおりである。(1) 全般的にみてわたしは 自分のことを () であると考えている。(非常に不幸から非常に幸福)。(2) わたしは自分と同年輩の人と比べて自分を () であると考えている(より不幸な人間からより幸福な人間)。(3) 全般的にみて非常に幸福な人たちがいます。この人たちはどんな状況のなかでもそこで最良のものをみつけて人生を楽しむ人たちです。あなたほどの程度そのような特徴をもっていますか(まったくないからともある) (4) 全般的にみて非常に不幸な人たちがいます。この人たちはうつ状態にあるわけではないのにはたから考えるよりもまったく幸せではないようです。あなたほどの程度そのような特徴をもっていますか(まったくないからともある)。
- ⁴ 生活満足度に関しては、吉武 (2010) [12]より 7 項目を 5 件法で尋ねた。項目は次のとおりである。対象が母親なので、自分を私に置き換えて尋ねている。(1) 自分の生活はうまくいっていま

す。(2) 自分の生活に満足しています。(3) 今の生活の中で変えたいと思うことがたくさんあります。(4) ちがった生活ができたらいいと思います。(5) 楽しい毎日を送っています。(6) 自分の生活で欲しいものは持っています。(7) 自分の生活はほとんどの子よりもいいです。

- 5 育児効力感に関しては、田坂 (2003) [13]より 8項目を 4件法で尋ねた。項目は次のとおりである。(1) 母親であることに自信を持っている。(2) 子どものために頑張って何をしても思い通りにしてくれない。(R) (3) 子どもと何がうまくいかないことがある時はどうすることもできない。(4) 1人の母親としてうまくやっているとと思う。(5) 母親としての役割を果たせていないと感じる。(6) 母親としてどうふるまったらいいのかをよく知っている。(7) 子供との間に起きる問題はたいてい解決することができる。(8) 子どもとうまくいかないことがあるとうまくいくまで頑張り続ける。

- 6 夫婦関係満足度は堀口 (2006) [7]堀口より、13項目をはい、どちらでもない、いいえで尋ねた。項目は次のとおりである。(1) 私は夫/妻といると安らいだ気持ちになれる。(2) 夫/妻は私に思いやりを示してくれる。(3) 夫/妻は私の嫌がることをしないようにしてくれる。(4) 私は夫/妻に何でも気楽に話せる。(5) 夫/妻は私がこれまで成し遂げてきたことを認めてくれていると思う。(6) 意見が対立するとき。夫/妻は何とか妥協点を見出そうと努力してくれる。(7) 夫/妻は私に何でも気楽に話してくれる。(8) 夫/妻は私の欠点だけではなく長所も認めてくれていると思う。(9) 夫/妻は毎日の生活を楽しく意味のあるものにするよう努力してくれる。(10) 私が何かしようとするとき夫/妻は たいてい励ましてくれる。(11) 夫/妻 は私が生きがいを見つけられるよう助けてくれる。(12) 全体的にみて私は夫/妻に満足している。(13) もう一度生まれ変わるとしても同じ人と結婚したいと思う。

- 7 夫からの育児サポートと夫婦関係に関しては笠井 (2007) [14]より 13項目を 4件法で尋ねた。項目は次のとおりである。(1) 夫と 2人で育児を行っている。(2) 夫と子どもの様子についての話し合いをする。(3) 夫は子どもの世話をする。(4) 夫はあなたのストレス発散のための配慮をする。(5) 夫に子どもについての心配事の相談ができる (6) お互いに大切にしている。(7) 夫と喜びや悲しみを共有できる。(8) 夫はあなたのことをよく理解している。(9) 夫を信頼できる。(10) 夫はかけがえのない存在である。(11) 夫は温かい声かけをする。(12) お互いに異性として意識している。(13) 夫との日常会話は多い。